

令和 4 年 5 月 19 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01667

研究課題名（和文）学びのプロセスと日本語書記史を統合する学習材・学習方法・カリキュラムの開発と検証

研究課題名（英文）Development and Analysis of New Learning Materials, Learning Methods, and Curriculum that Combine Learning Processes with the History of Japanese Writing System

研究代表者

鈴木 恵（SUZUKI, Megumu）

新潟大学・人文社会科学系・フェロー

研究者番号：60163010

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語の歴史的変遷を背景とした「国語の特質」に着目し、日本語独自の思考様式（ものの見方・考え方）の解明を行い、学習者の思考様式の変容を促す、古典学習教材、学習方法、カリキュラムの開発を行ったものである。具体的には、古典作品の諸伝本や同文説話を比較することを通して、「話し言葉と書き言葉」や「漢文訓読文と和文」など、基盤となる文体の相違や、歴史的な変遷による相違が、言語上にさまざまな形で現れることを学習するための、古典教材の開発とその検証授業を行った。現代に生きる学習者が、自らの言語活動について改めて捉え直すことができる、新たな古典教育の可能性を提言した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本語の歴史的変遷を背景とした「国語の特質」から、日本語独自の思考様式の解明を行い、学習者の思考様式の変容を促す、古典の学習材・学習方法・カリキュラムの開発を進めた。3ヶ年にわたる研究により、学習者が真正の学びをするために、言わば「言語文化共同体」へ「参加・参入」という、新たな古典学習の方法を提言した。これは、明治以来の「典型概念としての古典観」や、昨今の「関係概念としての古典観」とは全く異なる、「参入概念としての古典観」を基盤とする新たな考え方で、日本語話者及び日本語特有の「ものの見方・考え方」の解明につながるものと確信している。

研究成果の概要（英文）：This study aims to develop new Japanese teaching materials using classical literature. In this study, we emphasize the historical transition of the Japanese writing system, specifically the fact that different styles of writing systems have existed simultaneously throughout each era. We examined different texts from the same source and clarified differences in thinking styles based on the following viewpoints: 1) spoken language and written language, 2) Chinese writing style `kanbun-kundokubun` and Japanese writing style `wabun`. Based on the results, we developed learning materials, learning methods, and curriculum, and conducted verification classes.

研究分野：国語学（日本語学）、国語教育学

キーワード：言語文化共同体 古典教材開発 学習方法開発 カリキュラム開発 論理的思考力

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

従来、学習指導要領(国語科)において「言語事項」とされていた、文字・表記、音声・音韻、語彙・語法など日本語学領域に関わる学習内容は、平成20年の改訂において、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」として統一的に位置づけられた。しかし、平成29年の改訂で当該事項は、「思考力、判断力、表現力等」と並置される「知識及び技能」の中の、(1)言葉の特徴や使い方に関する事項、と(3)我が国の言語文化に関する事項、とに分離されて位置づけられることになった。結局、両者は直接的に関連づけられることなく、「言語事項」は相変わらず通常の教材とは別個に、言わばコラム的に取り上げられ学習される現状にある。加えて、日本語学的内容ですら、その大部分は共時的な現代日本語の記述に基づく知見を中心に説かれている。すなわち、その背景として位置づけられてしかるべき歴史的な観点は(社会・文化・言語の変遷)は、残念ながらさほど重要視されていないのである。

そこで、本研究では日本語の特質の一つである、歴史的変遷を背景とした複層性や、それに密接に関連するであろう、学習者及び古今の日本語話者特有の思考様式(ものの見方・考え方)を解明し、それらを踏まえた学習材・学習方法・カリキュラムの開発と検証を試みることにした。

2. 研究の目的

本研究は、学びのプロセスと日本語書記史を統合する学習材・学習方法・カリキュラムの開発と検証を目的とする。特に、日本語の歴史的変遷を背景とした「国語の特質」を解明し、それを踏まえた分析検討を行う点に特色がある。具体的には、日本語に特有の「思考様式」に着目し、国語教育学領域において研究・実践されてきた思考様式の解明、日本語話者としての学習者の思考様式の解明、日本語学領域(特に日本語書記史)から見た日本語特有の思考様式の解明、「書くこと」の学習を中心に据えた、学習材・学習方法・カリキュラムの開発と検証、を行うものである。

3. 研究の方法

本研究では、日本語特有の思考様式を解明し、それを踏まえた「書くこと」の学習材・学習方法・カリキュラムの開発と検証を行う。「国語教育学領域」と「日本語学領域」とにおける思考様式の解明については同時並行的に実施することとし、日本語の思考様式の追究と連動する、学習材・学習方法・カリキュラムの開発と検証については、段階を追って協働して進捗させることにした。

前項に掲げた、「国語教育学領域において研究・実践されてきた思考様式の解明」については、先行研究・実践の分析検討と学校現場における調査を実施する。「日本語学領域における日本語独自の思考様式の解明」については、古典資料の調査と書記テキストの分析により、新たな学習材の素材発掘を行う。また「学習材・学習方法・カリキュラムの開発と検証」については、と の成果を基盤とする実験的な研究授業の実施、及びその検証において行うことになる。

4. 研究成果

(1) 本研究の成果

本研究では、日本語の歴史的変遷を背景とした「国語の特質」から、日本語独自の思考様式の解明を行い、学習者の思考様式の変容を促す、古典の学習材・学習方法・カリキュラムの開発を進めた。3ヶ年にわたる研究により、学習者が自らの言語活動について、自覚的に捉え直すことを可能にする学習材・学習方法を開発し、これを実験的な研究授業によって検証することにより、古典学習の新たな可能性を提言することができた。

学習者が学ぶ言語(現代日本語)の有り様を知るためには、日本語の歴史的変遷を背景とした「国語の特質」を解明する必要がある。その「国語の特質」とは、外国語と比較した際に認められる日本語の言語的な特徴(文字・表記、音声・音韻、語彙・語法など)だけを指すのではない。むしろ、日本語話者の思考を突きつめることによって得られる、古今の日本語話者特有の「ものの見方・考え方」、引いては日本語特有の「ものの見方・考え方」に深く関わるものであるはずである。

また、言語の歴史的変遷を前提とすることにより、古典教育に新たな学習内容とその方向性を示唆することが可能となる。現代に生きる学習者にとって、古典に描かれた世界やそこに使用された言語は、自らの日常とは直接には関係しない、遠く離れた時間・空間に存在しているものと考えがちである。しかも、現代人としてのフィルターを通すことにより、現代に引き寄せた解釈になりがちである。しかし、学習者の言語観や価値観を変容させるだけの魅力とエネルギーを持った学習材・学習方法は、必ずや存在するはずである。学習者の「学び」に影響を与え、「学び」の質を変容させうる古典学習は、学習者自身を「言語文化共同体」(後述)の中に誘い、古典の世界(過去)と現代とを行き来させる仕組みを設定することにより、確かに実

現し得ることがわかってきた。

本研究における、学びのプロセスと日本語書記史を統合する学習材・学習方法・カリキュラムの開発は、「読む」「書く」言語活動における思考様式（ものの見方・考え方）の深化を目指している。その結果、古典作品は「読む」ための教材から「書く」ための教材へと、その位置づけを拡張させることにもなるのである。

以下、各年度における活動について略述するが、最大の成果は末尾にまとめたメンバー各員による業績に集約されている。

（２）令和元年度の活動と成果

令和元年度の第1回打ち合わせは、同年8月31日・9月1日の両日に、新潟大学東京事務所において、メンバー5名と研究協力者2名の計7名が一堂に会し、順調かつ充実した内容で実施することができた。全員による研究発表・報告の後、活発な質疑応答がなされ、今後の研究の進め方等に関して詳細な検討がなされた。しかし、翌令和2年3月14日・15日に、同会場において開催する予定であった第2回については、折柄の新型コロナウイルスの感染拡大により、やむなく中止せざるを得なくなった。今後の打ち合わせの在り方について、検討を要する事態となった。

研究協力校における授業実践については、令和元年12月11日・12日・16日に『伊曾保物語』の「犬と肉のこと」を教材とし、万治絵入本と天草版とを比較検討しつつ、「書き言葉」と「話し言葉」の学習につながる研究授業（福山市立加茂中学校、永井ほのり教諭）を実施することができた。

また、研究初年にあたるこの年度は、前科研から継続的に行っている研究を拡充する形で、研究課題に関わる基礎的な研究を進め、年度末には成果をとりまとめた共同論考を投稿する予定であったが、次年度に先送りすることとなった。

（３）令和2年度の活動と成果

令和2年度の研究打合せは、ZOOMによる非対面方式に改めた。これを同年12月19日と令和3年3月16日の2回開催した。メンバー各員、充実した研究発表・報告を行った。

研究協力校における授業実践については、学校現場に入りにくい状況が続いたため、なかなか計画通りには実施できなかった。しかし、鈴木恵「『竹取物語』の新たな授業づくりの方法」（『新大國語』第42号）に基づく古典教材『竹取物語』に関する研究授業を、令和2年12月2日（新潟大学附属長岡中学校、伊藤裕教諭）、令和3年3月18日（長岡市立南中学校、本井啓介教諭）の2本実施することができた。

前年度から取り組んでいるメンバー全員による共同論考は、さらにブラッシュアップして全国大学国語教育学会『国語科教育』に投稿することになった。

（４）令和3年度の活動と成果

令和3年度の研究打合せもまた、ZOOMによる非対面方式とした。これを同年6月23日と7月26日、令和4年3月30日の3回開催した。メンバー各員、充実した研究発表・報告を行ったが、とりわけ最終第3回は、次期科研につながる極めて発展的な内容となった。

この年度もまた、コロナ禍の中ではあったが、積極的に研究協力校において研究授業を行った。令和3年8月17日・18日の新潟県立佐渡高校の特別編成クラスにおける研究授業（久保祥子教諭）、同年11月19日の福山市立常金中学校における研究授業実践（迫香那子教諭）の2である。

また、この3ヶ年にわたる研究の成果を、『令和元年～令和3年度 科学研究費助成事業・研究成果報告書』（全208頁）としてまとめ、令和4年3月に発行することができた。本報告書では、中学校・高等学校現場における実践報告を、より多く掲載するように努めた。

以下にその目次を掲げる。

第1章 本研究の目的

第2章 教材開発

日本語の変化と葛藤過程を学ぶ学習の教育内容構成と教材 松崎正治

中学校国語教科書（令和3年度版）における「書くこと」教材の特徴 田中宏幸

『竹取物語』の新たな授業づくりの方法と実践（理論編） 鈴木 恵

第3章 教材別実践研究

第1節 『竹取物語』の実践研究

『竹取物語』の新たな授業づくりの方法と実践（実践編） 新潟大学附属長岡中学校における実践 伊藤 裕

『竹取物語』の新たな授業づくりの方法と実践（実践編）別紙資料（授業発話記録）

伊藤 裕

『竹取物語』の新たな授業づくりの方法と実践（実践編） 長岡市立南中学校における実践 元井啓介

『竹取物語』の新たな授業づくりの方法と実践（実践編）授業発話・板書の記録

元井啓介

第2節 『宇治拾遺物語』の実践研究

『宇治拾遺物語』の「言語」を考える授業実践 日本語書記史の観点による古典の教化
久保祥子・磯貝淳一

第3節 『平家物語』の実践研究

日本語書記史からみた古典教育の新しい授業開発の試み 『平家物語』の異本比較を採り入れた「扇的」の授業 田中宏幸・迫香那子・森美智代

第4節 『伊曾保物語』の実践研究

言葉を学ぶ教材としての『伊曾保物語』 国字本・天草版の比べ読みから 磯貝淳一
『伊曾保物語』で学ぶ言語事項の授業実践 話し言葉と書き言葉の違いを中心にして
森美智代・永井ほのり・田中智也

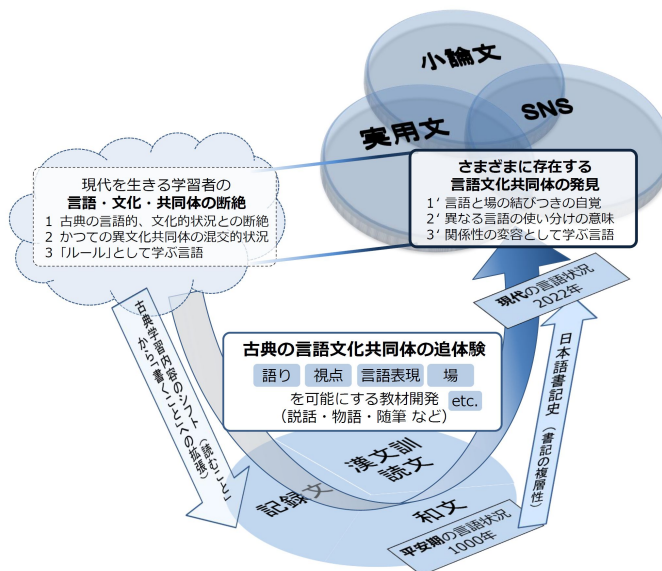
第4章 成果と課題

(5) 本研究の課題と展望

以上、本研究が構想する学習材と学習方法、また授業デザインを示し、具体的な実践によって新たな古典学習の可能性を提案した。しかし、教材開発できたのは、現代の学習者が向き合う日本語書記史のごく一部に過ぎない。今後は定番教材の新たな位置づけを検討する作業を進める一方で、未開拓の学習材の開発も検討していく必要がある。その過程において、開発された学習材がどのような系統性を持ち、学習者の発達段階にどのように位置づけられるのか説明するために、学習内容・学習材・学習方法を総合的に分析検討することが肝要となる。

また、右図に示したように、学習内容や授業デザインの検討から、古典の学習方法として、古典の世界の追体験を実現するため、学習者が仮想的に古典の世界（過去）と現代とを行き来する、「言語文化共同体」の解明が不可欠であるとの見解に至った。

ちなみに、中央教育審議会は平成28年の答申において、「我が国の言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため、伝統文化に関する学習を重視することが必要である。」として、いわゆる古典教育の必要性・重要性を説いてはいるが、それは「継承・発展」させる態度と関連づけられている。これでは、古典を完成された正典として受け入れる、明治期以来の「典型概念としての古典観」や、あるいは現代の学習者に主体的な読みをさせようとする、昨今の「関係概念としての古典観」を基盤とするに過ぎない。そこで、当グループでは学習者が真正の学びをするために、「言語文化共同体」へ参加・参入するという、「参入概念としての古典観」を基盤とする、新たな古典学習を案出した。こうした古典学習における「言語文化共同体」の追体験こそ、古今の日本語話者及び日本語特有の「ものの見方・考え方」の解明につながる、重要なポイントとなると確信している。



科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計37件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 鈴木恵	4. 巻 -
2. 論文標題 『竹取物語』の新たな授業づくりの方法と実践(理論編)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和元年～令和3年度科学研究費・研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 35-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木恵	4. 巻 第33号
2. 論文標題 『竹取物語』の新たな授業づくりの方法 情報の充実と音読の方法	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ことばとくらし	6. 最初と最後の頁 3-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木恵	4. 巻 第13巻第2号
2. 論文標題 『論語』の新たな授業づくりの方法 学而篇の訓読法を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新潟大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 67-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木恵	4. 巻 第41号
2. 論文標題 『徒然草』の新たな授業づくりの方法 第九二段をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 新大国語	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木恵	4. 巻 第32号
2. 論文標題 辞書と文法 『新潮国語辞典』初版と第二版をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ことばとくらし	6. 最初と最後の頁 3-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木恵	4. 巻 第32号
2. 論文標題 『徒然草』の新たな授業づくりの方法 第九二段をめぐって (令和元年度新潟県ことばの会研究発表要旨)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ことばとくらし	6. 最初と最後の頁 25-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木恵	4. 巻 第13巻第1号
2. 論文標題 魯迅「故郷」の新たな授業づくりの方法 井上紅梅訳・原文との比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 新潟大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 21-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中宏幸	4. 巻 -
2. 論文標題 中学校国語教科書(令和3年度版)における「書くこと」教材の特徴	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和元年～令和3年度科学研究費・研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中宏幸	4. 巻 49
2. 論文標題 休学を思いとどまった学生の思い	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 渦中(3) (大村はま国語教室の会『はまかぜ』)	6. 最初と最後の頁 62-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中宏幸	4. 巻 第50号
2. 論文標題 ICTを活用した日本語文章表現指導の開発 相互評価におけるICTの活用	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 安田女子大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中宏幸	4. 巻 第91集
2. 論文標題 書評：青木雅一『高等学校国語科授業の探究 短歌の創作・鑑賞指導を求めて』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 57-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中宏幸	4. 巻 第4輯
2. 論文標題 中学校国語教科書(令和3年度版)における「書くこと」教材の特徴	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 安田文芸論叢	6. 最初と最後の頁 257 - 280
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中宏幸・迫香那子・森美智代	4. 巻 -
2. 論文標題 日本語書記史からみた古典教育の新しい授業開発の試み 『平家物語』の異本比較を採り入れた「扇の 的」の授業	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和元年～令和3年度科学研究費・研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 167-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中宏幸	4. 巻 第51号
2. 論文標題 「書くこと」の指導における場の設定と課題のあり方 東広島市立東志和小学校の取り組み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語国文論集	6. 最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中宏幸	4. 巻 第49号
2. 論文標題 オンライン授業による日本語文章表現指導の開発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 安田女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中宏幸	4. 巻 第88号
2. 論文標題 書評：斎藤隆彦著『《類似》でつなぐ力を育てる中学校国語科授業の研究』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 54-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中宏幸	4. 巻 第358号
2. 論文標題 どの子も楽しく書ける！ 「書くこと」指導のポイント 「書く場」の設定と「題材」の発見	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践国語研究	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中宏幸・平田倫香	4. 巻 第25集
2. 論文標題 国語教育における読書指導の研究 「読書へのアニメーション」の授業実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 安田女子大学大学院紀要	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中宏幸	4. 巻 第38巻5号
2. 論文標題 高等学校「国語表現」の授業をどう考えるか 学習指導計画の作成と評価	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 96-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中宏幸	4. 巻 第54号第1分冊
2. 論文標題 近代中等作文教育における修辞学の受容と実践展開 五十嵐力・佐々政一・金子彦二郎を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語論説資料	6. 最初と最後の頁 32-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松崎正治	4. 巻 第39巻
2. 論文標題 日本語の変化と葛藤過程を学ぶ学習の学習観・教育内容・教材の研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 同志社女子大学総合文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松崎正治	4. 巻 -
2. 論文標題 日本語の変化と葛藤過程を学ぶ学習の教育内容構成と教材	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和元年～令和3年度科学研究費・研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 7-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松崎正治	4. 巻 第591号
2. 論文標題 個別最適な学びの社会的・歴史的文脈	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月刊国語教育研究	6. 最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松崎正治	4. 巻 第19号
2. 論文標題 世界を切り分ける力としての言葉による見方・考え方	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語の授業改革	6. 最初と最後の頁 140-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯貝淳一	4. 巻 -
2. 論文標題 言葉を学ぶ教材としての『伊曾保物語』 国字本・天草版の比べ読みから	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和元年～令和3年度科学研究費・研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 177-185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯貝淳一	4. 巻 第13集
2. 論文標題 『注好選』における左右両訓と和化漢文の用字 説話資料書記の特徴について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語の普遍性と個別性	6. 最初と最後の頁 (1)-(15)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯貝淳一	4. 巻 -
2. 論文標題 高山寺蔵『打聞集』翻刻(三)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和三年度高山寺典籍文書総合調査団報告論集	6. 最初と最後の頁 81-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保祥子・磯貝淳一	4. 巻 -
2. 論文標題 『宇治拾遺物語』の「言語」を考える授業実践 日本語書記史の観点による古典の教材化	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和元年～令和3年度科学研究費・研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 143-165
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯貝淳一	4. 巻 第32号
2. 論文標題 言葉を学ぶ教材としての『伊曾保物語』 国字本・天草版の比べ読みから (令和元年度新潟県ことばの会研究発表要旨)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ことばとくらし	6. 最初と最後の頁 19-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯貝淳一	4. 巻 第11集
2. 論文標題 和化漢文にみる書記言語の特質について 『後二条師通記』本記・別記の文体差から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語の普遍性と個性	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯貝淳一	4. 巻 -
2. 論文標題 高山寺蔵『打聞集』翻刻(二)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 令和元年度高山寺典籍文書総合調査団報告論集	6. 最初と最後の頁 118-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森美智代・永井ほのり・田中智也	4. 巻 -
2. 論文標題 『伊曾保物語』で学ぶ言語事項の授業実践 話し言葉と書き言葉の違いを中心にして	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 令和元年～令和3年度科学研究費・研究成果報告書	6. 最初と最後の頁 184-196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森美智代	4. 巻 第91集
2. 論文標題 小学校入門期における子どもの書字実態に関する考察 観察法(エスノグラフィ)によるエピソードデータの分析を通して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 35-43
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.20555/kokugoka.90.0_35	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森美智代	4. 巻 第24号
2. 論文標題 「きく」という教授スタイルの提案:「幼小接続期」から展望する(記録)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語教育思想研究	6. 最初と最後の頁 31-41
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森美智代	4. 巻 第9巻
2. 論文標題 論理的視点からみた文学教育の目標論の探究:「可能世界」という理論的装置を手がかりとして	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 47-57
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.15096/fcu_education.09.04	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森 美智代、倉盛 美穂子、太田 直樹	4. 巻 8
2. 論文標題 小学校入門期の授業における教師と子どもの相互作用の実態:国語科と算数科授業で重視される目標の違いに着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 初等教育カリキュラム研究	6. 最初と最後の頁 49~60
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/48910	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森美智代	4. 巻 第1221号
2. 論文標題 さまざまな学問と学習者を媒介する国語科の教材	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計29件 (うち招待講演 11件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 鈴木恵
2. 発表標題 辞書と文法 『新潮国語辞典』初版と第二版をめぐって
3. 学会等名 令和元年度中越国語教材を読む会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木恵
2. 発表標題 『徒然草』の新たな授業づくりの方法 第九二段をめぐって
3. 学会等名 令和元年度新潟県ことばの会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中宏幸
2. 発表標題 言葉に命を吹き込む 表現と読書
3. 学会等名 第62回九州小学校国語教育研究会長崎大会 (オンライン大会) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中宏幸
2. 発表標題 「生きる力」の根っこを育てる 「主体的に学び、思考を働かせ表現すること」と「読書」
3. 学会等名 呉市立和庄中学校区小中一貫教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中宏幸
2. 発表標題 「生きる力」の根っこを育てる 「読書生活の指導」
3. 学会等名 呉市小学校教育研究会学校図書館部会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中宏幸
2. 発表標題 主体的に学習に取り組む児童の育成～文学的文章を読むことを通して～
3. 学会等名 広島県府中町立府中中央小学校研修会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中宏幸
2. 発表標題 ポスターを読む
3. 学会等名 広島市立春日野小学校研修会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中宏幸
2. 発表標題 「書くこと」の指導における場の設定と課題のあり方
3. 学会等名 安田女子大学日本文学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中宏幸
2. 発表標題 「主体的・対話的で深い学び」と「言葉による見方・考え方」
3. 学会等名 第61回九州小学校国語教育研究大会佐賀大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中宏幸
2. 発表標題 近代中等作文教育における修辞学の受容と実践
3. 学会等名 国語教育史学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松崎正治
2. 発表標題 主体的・対話的で深い学び につなげる教材の構成と読み～比べる・つなげる
3. 学会等名 鳥取県東部中学校教育振興会国語部会夏期研修会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松崎正治
2. 発表標題 学校におけるケア・福祉・生活指導と授業づくり 久保恵美教諭による小学5年国語実践(2017年度)
3. 学会等名 日本教育方法学会第23回研究集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉永紀子・松崎正治
2. 発表標題 学びの深さを志向する学級における教師の 結び付ける力 の分析 文学教材の読みをめぐる学習者の変容を通して
3. 学会等名 日本教育方法学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 和化漢文と日本語書記 『探要法花験記』における文末助字「也」の機能に着目して
3. 学会等名 第5回 日本語・日本文化国際学術大会(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 「コミュニケーションの言語」を学ぶための古典 『枕草子』を例に
3. 学会等名 令和3年度新潟県ことばの会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 「言語」の文化をつくる場 = 授業 ~ 「言葉がもつ価値」の可能性 ~
3. 学会等名 令和3年度新潟県高等学校教育研究会国語部会全県協議会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久保祥子・磯貝淳一
2. 発表標題 『宇治拾遺物語』の「言語」を考える授業実践 日本語書記史の観点による古典の教材化
3. 学会等名 令和3年度新潟大学人文学部国語国文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 読まないものをなぜ書くのか 漢字文の日本語書記史研究
3. 学会等名 令和2年度新潟大学教育学部国語国文学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 「コミュニケーションの言語」を学ぶための古典 『枕草子』を例に
3. 学会等名 令和元年度中越国語教材を読む会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 談義聞書テキストの構造と展開 「口語」の表現価値再考
3. 学会等名 令和元年度新潟大学言語研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 東寺観智院蔵注好選の用字について 左右両訓を有する漢字の性格から
3. 学会等名 令和元年度新潟大学人文学部国語国文学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤井俊博・磯貝淳一・山中延之・中野直樹・久田行雄・山本佐和子・石井行雄
2. 発表標題 園城寺所蔵訓点資料について 『新版点本書目』補遺として
3. 学会等名 訓点語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 磯貝淳一
2. 発表標題 言葉を学ぶ教材としての『伊曾保物語』 国字本・天草版の比べ読みから
3. 学会等名 令和元年度新潟県ことばの会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森美智代
2. 発表標題 「きく」という教授スタイルの提案：「幼小接続期」から展望する
3. 学会等名 こころもち学習ネットワーク（オンライン開催）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森美智代
2. 発表標題 自ら学ぶ子どもを育む国語教室の環境構成 モンテッソーリ・メソッドを手がかりとして
3. 学会等名 第5回初等教育カリキュラム学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mihoko Kuramori, Chikako Nagahara, Michiyo Mori and Miharu Shingai
2. 発表標題 Differences in nursery teachers and elementary school teachers' teaching behavior
3. 学会等名 The PECERA 20th Conference, Taipei, Taiwan (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yu Haruki, Michiyo Mori
2. 発表標題 Research on the quality of early childhood education: Based on the examination of transition curriculum between preschool and elementary school education
3. 学会等名 OMEP Asia Pacific Regional Conference, Kyoto, Japan
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森美智代
2. 発表標題 小学校入門期における子どもの書字実態に関する考察
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 春木憂・森美智代
2. 発表標題 幼児教育と小学校教育をつなぐ「ことば」の教育：接続期カリキュラムに関する調査をもとに
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 浜本純逸監修、松崎正治・藤原顕・目黒強（共著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 318
3. 書名 対話を通してことばを深く学ぶ主体の形成 神戸大学附属住吉小学校・中学校の国語 科総合単元学習の軌跡	

1. 著者名 浜本純逸監修、幸田国広編、森美智代（共著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 256
3. 書名 ことばの授業づくりハンドブック 探究学習	

1. 著者名 石塚晴通・月本雅幸・松本光隆・山本真吾・池田証寿・徳永良次・矢田勉・磯貝淳一・白井純・古田恵美子・土井光祐・金水敏・末木文美士・大槻信・山中延之	4. 発行年 2020年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 536
3. 書名 高山寺経蔵の形成と伝承	

1. 著者名 浜本純逸監修、三藤恭弘編、松崎正治（共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 206
3. 書名 ことばの授業づくりハンドブック 小学校「物語づくり」学習の指導	

1. 著者名 全国大学国語教育学会（松崎正治共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東洋館出版	5. 総ページ数 266
3. 書名 新たな時代の学びを創る 中学校・高等学校国語科教育研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田中 宏幸 (TANAKA Hiroyuki) (40278966)	安田女子大学・文学部・教授 (35408)	
研究分担者	松崎 正治 (MATSUZAKI Masaharu) (20219421)	同志社女子大学・現代社会学部・教授 (34311)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	磯貝 淳一 (ISOGAI Junichi) (40390257)	新潟大学・人文社会科学系・教授 (13101)	
研究分担者	森 美智代 (MORI Michiyo) (00369779)	福山市立大学・教育学部・教授 (25407)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関